

現職日本語教師研修のための文法と誤用分析教材開発

許明子 和氣圭子

要 旨

文法と誤用分析の目標としては研修生自身の日本語のブラッシュアップを図るとともに、初級レベルの文法項目の再認識を通して学校現場で教えている文法教育の方法について再考察することが狙いである。

教材内容としては大きくヴォイス、副詞、授受動詞の3つの文法項目を取り上げた。ヴォイスの中では「(ら)れる」の意味に重点をおきながら受身、可能、自発、尊敬について意味や使い方を確認し、自動詞・他動詞、使役などの表現についても取り上げた。また、副詞では呼応関係と擬声語・擬態語を取り上げ、授受動詞文では物と動作の移動と待遇関係を取り上げた。この科目では文法項目の確認と整理を行うと同時に、韓国人日本語学習者の誤用の傾向を把握し、誤用を防ぐために日本語と韓国語の対照を行った。
【キーワード】ブラッシュアップ 文法教育 誤用分析 ヴォイス 副詞 授受動詞

The Teaching Material for In-service Japanese Teacher Training : focusing on grammar and error analysis

HEO Myeongja, WAKI Keiko

【Abstract】 The Grammar and Error analysis is intended for brushing up the trainee, Japanese language skills. Its purpose is a reconsideration of the method of grammar education currently taught, by re-evaluating the grammar items in of a beginner's level class at school.

The contents of this section pays closest attention to three grammar items: voice, adverb, and verbs of going and receiving. With regards to “voice”, the meaning and usage of “(ra)reru” are checked, as well as the expression involving intransitive/ transitive verbs, and causatives. Furthermore, in the case of “adverb”, agreement concord relations and onomatopoeia as well as their point of considered, as well as movement and between a thing and an action in case of the going and receiving verb sentences. This section apart from checking the grammar, also allows the reader to grasp the tendency of errors by Korean Japanese learners and presents a comparison of Korean and Japanese languages in order to prevent such errors.

【Keywords】 brush up, grammar education, error analysis, voice, adverb, going and receiving verb

1. はじめに

韓国京畿道外国語教育研修院における現職日本語教師を対象とする国内研修では必須科目として日本語の4技能を中心に聴解、読解、会話、作文、文法と誤用分析、教授法等の科目を開講することになった。その中で文法と誤用分析は、聴解、読解で取り上げている内容と関連のある文法項目を中心に教材を作成し、さらにその各文法項目について韓国人日本語学習者が間違いやすい表現を取り上げ、誤用分析を行った。

文法と誤用分析の目標は、現職日本語教師の日本語ブラッシュアップに重点を置きながら、各課で学習した内容を教育現場にどのように応用するかについても考えることである。韓国の中学・高校の日本語教育現場では初級日本語が中心になるため、本教材で取り上げる受身、自他動詞、使役、副詞、授受動詞文などは実際の学校現場に活用できる部分は少ないが、教師自身の日本語力の強化を図り、今後の持続的な日本語学習を助けることも念頭に置いて教材作成に取り掛かった。

本稿では本教材作成経緯と内容構成について報告する。

2. 文法教材作成の概要と経緯

2.1 経緯

本教材で取り上げた文法内容は、ユニット1の聴解と読解で扱う素材の中で「ら抜きことば」と「若者ことば」を取り上げているため、文法でも同じ項目を扱った。トピック1では「(ら)れる」形について、受身、可能、自発、尊敬の意味を確認し、その使い方について問題形式で確認しながら、解説を行った。トピック2では自動詞・他動詞の構文的特徴を確認するとともに、受身と使役、自動詞・他動詞の関係について取り上げた。ユニット2の聴解と読解の素材に関連する文法項目としてトピック3では使役、トピック4では擬声語・擬態語を取り上げた。また、ユニット3の聴解、読解で扱う「初対面」の素材から文法トピック5では「授受表現」を取り上げて教材作成を行った。文法の最後の時間にはトピック6として、高校の現場で日本語の文法を教えるための1コマ分の自作教材を作成することを目標にした。以上の文法と誤用分析教材で扱った内容は以下の通りである。

ユニット1 変化する日本語		ユニット2 日本人の特質		ユニット3 言語行動の韓日比較	
トピック1	トピック2	トピック3	トピック4	トピック5	トピック6
「(ら)れる」 の意味	自動詞・ 他動詞	使役	副詞/擬声 語・擬態語	授受表現	自作文法 教材作成

2.2 概要

文法教材の各課の構成は1ページに教案として、その課の目標、予習内容、教室活動(学習項目と時間配分)、教授法への応用、課題を1枚にまとめたものを提示した(<資料1>参照)。2ページには各課の参考文献リスト(<資料2>参照)を作成し、各課の授業内容(<資料3>参照)、参考資料、コラム(<資料4>参照)となっている。

各課の構成をまとめると以下ようになる。

- (1) 各課の教案
- (2) 参考文献リスト
- (3) 本文(問題形式の導入、解説、確認問題、誤用例の分析)
- (4) コラム
- (5) 参考資料

3. 各課の内容

各課の内容には、文法教材の全般において共通するものと、課によって特別に取り上げているものがある。まず、各課に共通することとして、内容はできるだけ易から難へすすめるように配慮した。どの課の項目も初級レベルで学習する文法が基本となるので、研修生にもある程度の知識があることを想定している。このため、解説から始めるのではなく、まず問題を提示して研修生に考えさせ、その後に解答例・解説を載せるようにした。これは研修生自身が自分がどこでつまずくのか、何を学習する必要があるのかを認識・確認できるようにするためである。また、教師側には研修生のレベルをつかみながら進められるように、ということを用意している。上級者向けの発展項目については先に解説を載せたものもある。

次に、各課で取り上げている内容をまとめると次のようになる。

(1) 第1課 「(ら)れる」の意味

この課では誤用分析は取り上げず、主に研修生の日本語能力の向上を目指した内容となった。

コース共通のトピック「若者言葉」に関連し、ら抜き言葉について知ることが一つの目標である。このら抜き言葉の前提として、「(ら)れる」という形式が担いうる用法に可能・受身・尊敬・自発の4種があることを確認し、それぞれの用法の基本を押さえ、これらを用いた文(談話)の意味を正しく理解できるようになる、という目標を設定した。4つの用法のうち自発は上級レベル項目と考え、用法の理解までの学習にとどめている。韓国語母語話者にとって日本語のヴォイスは難しい項目ということで、残り3つの用法は受身を中心にし、談話中の受身と可能、受身と尊敬の弁別を設問を解きながら確認・学習していくようにした(<資料3>参照のこと)。

さらに、他動詞の可能形「~れる」が対応する自動詞の普通形と同形になる場合があるこ

と(「割れる」など)にも触れている。

(2) 第2課 自動詞・他動詞

この課では第1課に引き続き、自動詞・他動詞というヴォイス項目を扱う。ただ単に自他のペアを覚え二者択一で文を作る、というレベルを脱し、受身・使役との関連も含めたヴォイスとしての自他について学ぶこと、そしてそうした総括的な視点に立って教師として持つべき知識を整理することを目標とした。

具体的にはまず、自動詞・他動詞の基本的な違い、自他動詞それぞれと共に用いられる文末表現を押さえ、自動詞文と他動詞の受身文の関連について学ぶ。そして対になる自他動詞の語彙を増やし、形態上の対応のパターン(「上がる/上げる」は-aru: -eru型、など)を知る、対にならない動詞を確認する、という内容となっている。

また、誤用分析の問題も設けた。韓国語母語話者によく見られる誤用を訂正し、なぜ誤りなのか理由を説明できるようになる、という教師としての能力向上を目指している。

(3) 第3課 使役

第1、2課に引き続きヴォイスの学習課である。使役・使役受身を中心に自動詞・他動詞との関連も含めた内容となった。受身との混乱が起りやすいということ、また、初中級レベルの研修生は1、2課の学習でかなり手一杯になっているだろうと想定し、活用形など初級で扱われる基本項目からいぬいに確認していくようにした。この課の内容は、第5課「授受表現」の項目「使役+授受表現(例:休ませていただく)」へとつながるものであり、その意味でも基本知識の確立を目指している。

使役についてはまず、1)活用形、2)被使役者を表す助詞(に/を)の選択、の基本の2点について、教師としての立場に立ってルールの確認を行う。次に使役の用法として、強制、許可、誘発、放置、責任、という5つを学ぶ。このうち放置と責任は上級のオプション項目とした。さらに、他動詞文と自動詞の使役文の関連についても学ぶ。

使役受身については、まず活用形を確認した上で、使役との使い分けができるようになることを目指している。

(4) 第4課 副詞、擬声語・擬態語

まず副詞については、文法項目としての副詞ということで、文末表現と呼応する誘導副詞(陳述副詞)を取り上げることにした。誘導副詞のうち、初級から学習し、比較的よく使うであろう表現として、1)否定と呼応する副詞(「あまり」など)、2)希望・願望と呼応する副詞(「ぜひ」など)、3)条件の表現と呼応する副詞(「もし」など)、4)推量の表現などと呼応する副詞(「たぶん」など)の4種を内容に含めた。1~3課までとは異なり、まず、学習する副詞を用いた例文を読んで意味・用法の確認を行う。文末との呼応がポイントなので、辞書の意味だけではなく文表現として身につけることを目指している。例文理解の後に確認問題、例文作成という順序で発展させていく。

次に擬声語・擬態語については研修前のインタビュー調査で擬声語・擬態語を学びたいという研修生からの要望があったのとユニット2で扱う内容をリンクさせることで取り上げることにした。

日本語の擬声語、擬態語は対象の様子や感情について直感的かつ感覚的に表すもので外国人学習者にはかなり難しい。しかし、韓国語にも豊富な擬声語・擬態語があり、韓国語との表現の違いを確認させるため日常的に頻繁に使われる擬声語・擬態語を中心に対照表を作って導入するようにした。擬声語・擬態語の導入の後には絵を見ながら擬声語・擬態語をマッチさせる方法で使い方を確認し、さらに文の中に最も適切な擬声語・擬態語を選択する問題形式で練習を行うようにした。

(5) 第5課 授受表現

物と動作の授受関係の確認、授受動詞と待遇関係を学習し、さらには「させていただく」の使役表現＋授受動詞の使い方や意味について取り上げた。使役表現に関しては第3課で取り上げているが、授受表現との組み合わせた表現はこの課で学習し、使役の復習を含めて待遇表現との関係についてさらに発展を図った。

また、誤用分析としては授受動詞の移動関係を学習した後、韓国人学習者によく見られる授受動詞文＋待遇表現の誤用例を提示し、正しい文に直し、間違っただ理由についても考えるようにした。この誤用分析を通して、韓国人学習者が授受動詞文、使役文、待遇表現で間違いを犯しやすい傾向と対策を考え、授受動詞文を教える際に注意すべき点をまとめる欄を設けた。

(6) 第6課 自作文法教材作成

この課では第1課から第5課までの学習を通して学校現場で実際に使える文法教材を作成することを目的としている。韓国の高校の日本語教育で使われている教科書は国定日本語教科書をはじめ12種類の教科書があるが、教師はほとんど教科書を中心に授業を進めており、自作教科書作成はあまり行われていないようである。しかし、学生のニーズが多様化しており、韓国においてもインターネット等を通じて日本の情報が大量に入ってきている。また、韓国の高校生の中には日本の大衆文化に興味を持っている学生が多く、実際に授業の中でも日本事情や日本の大衆文化に関する質問が多いというインタビュー調査の結果が出ている。

そこで、この課では国際交流基金日本語国際センターが運営しているホームページ「みんなの教材サイト」へアクセスし、学校の授業で使える教材や素材、ゲーム等を選び、文型練習、日本の文化紹介等を盛り込んだ教材を1時間50分作成することを目標にした。教案の立て方や教案のサンプルを提示し、実際の授業で使える文型練習の導入、練習に使用できる素材の選択、文法の指導方法などを考えることにした。研修生1人が1コマ分の教材を作成し、他の人と情報交換を行い、それぞれ作成した教材やアイデアを共有することがこの課の最終的な目標である。

4. 文法と誤用分析の特徴と今後の課題

教材作成を開始する際に文法と誤用分析の位置づけは統合シラバスとは別に韓国人学習者にとって習得しにくい文法項目を中心に独立した科目として運営するという案もあった。しかし、聴解と読解の教材で扱う素材の中に「(ら)れる」形の意味、使役、授受動詞文などのヴォイス範疇の表現が多く取り上げられていること、特集で擬声語・擬態語の使い方を取り上げていることなどから文法と誤用分析も統合シラバスによる授業運営を考えて、教材作成を行った。

本教材の最大の特徴は韓国人学習者が苦手意識を持っているヴォイス範疇を中心に教材作成を行ったことと、韓国語による語彙の確認、対照表などを利用した効果的な学習方法を図ったことである。これは本教材を使用する場所が韓国であること、授業を受ける対象が全員韓国人であることから可能になったことであり、日本国内の日本語教育では実現が難しいことである。

今後の本教材の検討課題としては研修生の日本語力と教材の難易度が合っているかどうか、研修生のニーズに応えられる内容であるかどうかを検討し、さらに改訂を行う必要がある。

<資料1>第1課の教案

《文法と誤用分析》

§ 1. 「(ら)れる」の意味

《目標》

1	受身・可能・尊敬の意味と形を区別する
2	談話における「(ら)れる」の意味(可能・受身)の違いを理解する
3	談話における「(ら)れる」の意味(尊敬・受身)の違いを理解する
4	他動詞の可能形と自動詞の用法を理解する
5	ら抜きことば

《予習》

1	日本語の動詞をグループ分けし、各グループの動詞をリストアップする	
2	「ら抜きことば」について調べる	
3	動詞の語彙リストを用いて、可能形・受身形の活用表を作る	p.12

《教室活動》

1	日本語の動詞の可能、受身の形を作る	10分
2	可能形と受身形	10分
3	可能と受身の意味	15分
4	受身と尊敬の意味	15分
5	ら抜きことば、自発と可能	15分
6	他動詞の可能と自動詞	15分
7	まとめ	10分

《教授法》

1	5段動詞(グループ)、1段動詞(グループ) 不規則動詞(グループ)の基本動詞のリストを作る	グループ20語 グループ20語 グループ10語
2	グループの可能形、受身の活用表を作る	
3	「(ら)れる」形の作り方のチャートを作る	

《課題》

1	学生が間違えやすい可能表現の誤用を事例する	5例以上
2	受身文を教えるときの問題点について考える	
3	誤用の事例を教える方法を提案する	

〈資料 2〉 第 1 課の参考文献リスト

参 考 文 献

- 安藤節子・小川栄子美 (2001) 『日本語文法演習 自動詞・他動詞、使役、受身 ボイス 日本語文法演習 上級』スリーエーネットワーク
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 北原保雄編 (2004) 『問題な日本語』大修館書店
- 小林典子他 (1995) 『わくわく文法リスニング 99 ワークシート』凡人社
- 小林典子他 (1995) 『わくわく文法リスニング 99 指導の手引』凡人社
- 白川博之監修 庵功雄他 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 寺村秀夫監修 (1989) 『日本語の運用力養成問題集 初中級用 2』凡人社
- 名古屋 YMCA 教材作成グループ (1995) 『日本語初中級 理解から発話へ』スリーエーネットワーク
- 野田尚史 (1991) 『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 許明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 松岡弘監修 庵功雄 他 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 山岡千弘・山谷陽子 (1991) 『項目別日本語文法問題集 - 初中級用』凡人社
- 山本弘子監修 K.A.I.T. (2003) 『実践にほんご指導見なおし本 語彙と文法指導編』アスク

〈資料3〉第1課の本文6ページより

6. 次の「見られる」は、受身、尊敬、可能のどの意味ですか。

1) A : 先生、昨日のテレビで先生が書かれた本を紹介していましたが、見られましたか。

B : あ、そう。残念ながら見てないな。なんて言ってた？

2) A : 母がさ、よく私のケータイ見るんだよね。きのう写真を見られてさ。

すっごく恥ずかしかったんだよ。

B : それ、すごいやだよねえ。

3) A : 前からぜひ見ようと思っていた映画があったんだけどね。見られなかったよ。

B : どうしてですか。

A : やっと時間ができて見に行ったら、もう終わってたんだよ。

B : それは残念でしたね。でも、今はすぐDVDになりますからねえ。

7. ら抜きことば

「見れる」「来れる」のように、グループ、グループの動詞では「ら抜き」ことばが多く使われます。「見られる」の「ら」を取って、短く表現するので「ら抜きことば」と言います。話しことばで多く使われていたのですが、最近では書きことばでもよく見るようになりました。

食べる 食べられる 食べれる

例) 日本料理は全部好きなんだけど、なっとうだけはどうしても食べれない。
それぞれ例文を作ってみましょう。

1) 起きる

例文：

2) 着る

例文：

3) 来る

例文：

〈資料4〉第1課のコラム

〈コラム〉

日本人同士の会話で

Wさんがある会合に遅れるという連絡をするため、Tさんに電話をしました。そのときの会話です。

W：もしもし、Wですけど。

T：あ、もしもしWさん。つかれましたか？

W：えっ、いや、まあ、疲れてるけど…。

T：いえ、そうじゃなくて、もう着いたんですか？

W：あ、いや、実はまだ家にいるんだ。

Tさんは「着く」の尊敬のつもりで「着かれましたか」と聞いたのですが、Wさんは「疲れましたか」の意味だと思い、突然電話でそんなことを聞かれてびっくりしたのです。

日本人同士の会話でも、ときどきこういう誤解がおこります。